

静岡・瀬名遺跡

所在地 静岡市瀬名

2 調査期間 一九八八年(昭63)四月~一九八九年三月

3 発掘機関 鋒静岡県埋蔵文化財調査研究所

4 調査担当者 佐野五十三・曾根辰雄

5 遺跡の種類 水田跡・集落跡

6 遺跡の年代 弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

瀬名丘陵は静岡平野の北側で、平野と丘陵が接する位置にあり、瀬名丘陵と南沼上丘陵とに挟まれた谷を南下する長尾川が形成した



(静岡・清水)

扇状地上(標高1m)に立地する。現在の行政区画では瀬名遺跡の東端に静岡市と清水市の境界線があるが、旧駿河国廬原郡に属し西隣の安倍郡との境界線は遺跡の西端付近となっている。

遺跡の範囲は東は瀬名丘陵の付け根から西は長尾川ま

で東西約九〇〇m(南北の範囲は未確認)であるが、長尾川の西側にひろがる扇状地上には、平安時代の官衙遺構の発見された川合遺跡群(宮下遺跡・川合遺跡・内荒遺跡、弥生中期~近世)が展開する。

調査は国道一号静清バイパス建設事業にともなうもので、扇状地を東西に横断するよう一区から一〇区までの調査区を設定し、一九八六年度から継続調査されている。発掘調査の結果、埋没した長尾川の旧河道・自然堤防・後背湿地・微高地といった地形区分が観察され、後背湿地の部分が水田として、また自然堤防・微高地の部分が墓域や建物を建てる場所として利用区分されることや、遺構面を被覆している土砂の様子から、一気におそった大洪水による砂礫・砂・シルト層などの堆積によって、埋没あるいは侵食・流出などの被害に遭遇した様子などが観察される。

木簡の発見された一区は遺跡の東端に位置し、自然堤防から後背湿地へと変換する地点にある。地表下約6mまでの堆積土層が三五層に区分され、弥生時代中期頃から近世まで一枚の遺構面が検出された。ほとんどは水田遺構であるが、①東海地方最古の水田(弥生中期?三五層)②埋葬姿勢のわかる人骨と木棺墓(弥生中期?二八層下面)③東海地方最古の小区画水田(弥生中期後半二八層)④三面廂の掘立柱建物(平安中期一七B層下面)などが検出されている。

木簡は二〇層で検出された自然流路SR-102の底部から発見された。流路は蛇行しながら北から南へ流れるもので、幅四・五m(

一・七m、深さ約〇・六m。幅の拡がった地点の右岸側に手づくね土器、斎串、人形（人面墨書き）などが発見された。斎串のなかには地面に突き刺したままの状態で発見されたものがあり、『万葉集』（巻第一三、三二二九）に「斎串立」とうたわれた祓の祭祀の状況を示すものと考えられる。流路の埋積土中からは田下駄・鋤・横槌・剣物・曲物底板・建築材・斎串のほか若干の土器片が発見されている。

一九層水田が平安時代（一一世紀）であり、一二〇層上面および流路の覆土からは八世紀後半から九世紀の土器が出土する。

8 木簡の釈文・内容

(1) ■〔件カ〕五百原□□□人□戸廣□□□
西奈□□□□□五百原□□□戸五□女□
〔目カ〕

(404)×(56)×10 081

出土したのは一点だけで材質は杉、木目はやや斜の板目。判読不

能の部分が多く裏面はほとんど読めない。上部の文字は「件」としてたが「仰」の可能性もある。「西奈」は『和名類聚抄』にててくる廬原郡の郡名のひとつであり、木簡の発見された地名「瀬名」は中世以降の比較的新しい用例である。「五百原」は廬原であり『古事記』には五百原君、「駿河国正税帳」には廬原君とでてくることから、地

名または人名と考えられる。その後に「戸」とあり「磨」「廣」などの人名が続く。女性名と考えられる「五目女」の目は月と解釈することも検討した。この木簡は行政の末端組織で人を集め、作業の手配をしたときの記録簿といった性格が考えられる。年代観について、遺構からは明確にできないが、楷書体であり、奈良時代のものと考えられる。

なお木簡の釈讀にあたっては東洋大学鬼頭清明氏、静岡大学原秀三郎氏、浜松市博物館向坂鋼二氏のご教示を得た。

9 関係文献

〔財〕静岡県埋蔵文化財調査研究所『瀬名遺跡－昭和六三年度静清バ
イパス埋蔵文化財発掘調査概報』（一九八九年）

（栗野克巳）

